

の名前に加え、「自民党同志会50 自民党職員350 自民党幹事長室100 自民党選対100 自民党国対100」と記されていた。これもマスコミへの経由地なのだという。こうして自民党の複数のルートを通じて、マスコミへ機密費が広く配布されていたのだ。

このリストは引き継ぎの際、後任の官房長官秘書官が新しいノートに書き写すと、前任者はノートやメモをシュレッダーにかけるなどして、処分していたという。そして、総理退陣の際、官邸に残された最後の儀式、機密費の「山分け」が行なわれる。

「基本は総理と官房長官で山分け。余った分はそれぞれ秘書官たちがお世話になった議員や官僚、評論家や記者らメディア関係者にも配って使い切る。引き継ぎのときは金庫を空にするのが礼儀だった(笑)」(官邸秘書経験者)

政権交代にともなう麻生内閣・河村健夫前官房長官の「消えた機密費2億50

政府専用機に乗るのは記者のステータスだった(橋本龍太郎首相)



00万円」の行方を探る上で、実に興味深い示唆ではないか。

ちなみに、元参院議員の平野貞夫氏も、「細川護熙氏が首相を辞める際に、『私は機密費を自分で使ったことがない。お世話になった方に何かしたいのだが、どうすればいいか』と相談してきた。『官房長官に相談すれば?』といったら、数日後に銀座から2万円の靴券が届いた。100人ぐらいいに配ったそうだ」と証言している。

90年代の内閣官房の元高官が明かしたのは、よりグ

ローバルな活動だった。

「ワシントン支局などに転勤が決まった政治部記者に、100万円単位でつけ届けるんです。それで2年間ほど向こうからの情報を送ってくれると考えれば、安いものです」

こうなると記者はちょっとした諜報員である。元官邸関係者らは、ほかにも生々しい実態を教えてくれた。

「昔は総理外遊などの際には政府チャーター機の中で機密費を政治部記者にお土産

官邸は機密費の目的を知らない!?

代として配っていたが、經濟部などよそ者がいる場合は後で個別に配っていた」といった受け渡しの詳細や、「記者を吉原や川崎のトルコ(風呂)に連れて行った」という風俗接待の有り様、「夜中に酔っぱらうとしょっちゅう機密費を無心してきた」「50万円から100万円にといった金額のランクアップを要求してきた」政治評論家の所業まで暴露。渡した側はみな次々と証言をしてくれる。

私は5月25日に行なわれた岡田克也外相の記者会見で、機密費がマスコミに渡っていた疑惑に関する見解を問うた。これに対し大臣は、「マスコミ対策に使われたかどうかは承知していない。それは内閣官房に聞いてもらいたい」と答えた。これに関しては平野博文官房長官の問題であると明言したのだ。

さて、その平野氏はいとうと、同25日、衆院議員の

官房長官からの引き継ぎに関しても、具体的な使途についての説明や、引き継ぎの帳簿は存在しなかったとしている。

平野官房長官は5月14日に、政権発足後の6か月で国庫から支出された官房機密費3億6000万円のうち、未使用分の約1620万円について国庫に返納したと発表している。裏を返せば、いまでも毎月約6000万円ずつ機密費を使っていることを明らかにしたわけだが、「何のために作られたものであるか」もわからず、「具体的な使途」も知らされないままにこれだけの税金を使っているとしたら、それこそ問題だ。

平野氏は事の重大さを理解しているのだろうか。政治とジャーナリズムの癒着をめぐる全面戦争の火ぶたは、とっくに切って落とされているのだ。

■官邸の通称 米国のホワイトハウス(白い家)、フランスのエリゼ宮(楽園)など、世界の官邸にはみな通称があるが、日本でも02年

に新築した総理官邸の通称を募集。「ミミズクの家」や「スクエアハウス(四角い家)」などが候補に挙がったが、定着しなかった。